

# 『古今集延五記』の表記について

——オ・ヲの書きわけ——

田 辺 佳 代

『古今集延五記』<sup>(1)</sup>は、延徳四年、法印堯恵が和泉守藤原憲輔に二条家相伝の註を伝授した古今集全巻にわたる聞書である。

表記は、古今集からの引用部分（詞書・作者名・歌・左注、以下歌部分と言う）を、ひらがな漢字交りで書き、注釈の部分（以下注部分と言う）を、カタカナ漢字交りで書いている。先に、<sup>(2)</sup>行転呼に関わる表記を中心に、その表記の様相を調べ報告したが、古今集引用のひらがな部分では、定家仮名遣によるものが多く見られたのに対し、注のカタカナ部分については、語中尾のワ行音をへ行のかんで表記する傾向も認められ、歌部分と注部分の表記に対する意識の違いがうかがわれた。

今回は、歌部分における「お」と「を」、注部分における「オ」と「ヲ」の書きわけについて調べ、これらの表記から定家仮名遣、およびアクセントの関連について考えてみたい。

## 一 概 観

歌部分・注部分それぞれにつき、「お・を」「オ・ヲ」の表記に

ついて、歴史的仮名遣を基準として、正表記・異表記の例を取り出し、これらを仮名遣書などに見られる「定家仮名遣」の規範的用法と比較した。その結果、全体的に次のような傾向を認めることができた。

- 1 歌部分と注部分とでは、表記の異なるものが見られる。
- 2 歌部分の表記は、「定家仮名遣」の用法によく合致しており、「お・を」の両表記を混用することはまれである。
- 3 注部分の表記は、不統一に両表記を混用するものが見られ、特に「オ」とあるべきを「ヲ」と異表記したものが多くみられる。

定家仮名遣における「お・を」の書きわけは、平声「お」、上声「を」をあてるというアクセント仮名遣であることが認められている。<sup>(3)</sup>『延五記』における表記では、歌部分については、古今集の引用であるため「定家仮名遣」の規範的な用法によく合致しているが、注部分では必ずしもこれによらず、同一箇所において歌部分と注部分との表記の違いのあらわれるものも見られ

る。例えば、

。(九—13—10) 47夕月夜おはつかなきを玉くしけ二見の浦は

14—10) 哥ノ心ハ夕月夜ハ影ヨハキ物ナレハヲホツカ

ナキトヨメリ

。(十二—10—5) 56みをつくしとそ我はなりける

—10) 爰ニミオツクシヲ立ヤカテ彼浦ニミオツク

シト云所モ有也

また、「おきて」と声点を付して、注釈を加えた部分に、

(十一—4—4) 470

一 をとにのみ菊のしら露よるはおきて ヨルハ起也オキフ

シノ用ニ取ニ依テオノ字ヲ平声ニヨム也露斗ノ時ハヲキテ

トハシノヲ文字ヲ上声ニヨム也

とあり、「オ」平声、「ヲ」上声とする意識があったことがうかがわれる。

堯恵は、永享二年（一四三〇）出生。常光院堯孝の口伝を受けた歌僧で、特に古今集の声句を得意としていた。生育地は不明であるが、堯孝の口伝をよく伝えている点から、阿克セント意識が充分あったとされる。ことに『延五記』の声点の付された部分については、秋永一枝氏が指摘されるように、二条家相伝の古写本に認められる鎌倉時代の京都阿克セントを反映するものと、堯孝・堯恵の注釈で、室町前期の京都阿克セントを反映するものとが認められる。

したがって、延五記のオ・ヲの書きわけについても、定家仮名遣における阿克セント仮名遣の原則によっていけば、阿克セント

を反映した表記とすることができる。

また、京都阿克セントは、鎌倉時代に、語頭に（低）が二音節続く型（○○型、○○●型、○○○型など）だったものが、室町時代には頭高の阿克セント型（●○○型、●○○○型、●○○○型）に変わるという、大きな阿克セント体系の変化を生じている。

これらの事柄を手がかりとして、オ・ヲの書きわけについて、語の時代別阿克セントと比較しつつ検討することとする。

なお、各時代の語の阿克セントは、次の資料にあたって調べた。

平安時代

——観智院本類聚名義抄（天理院蔵 善本叢書）・図書寮本類聚名義抄（勉誠社刊）・和名類聚抄（馬淵和夫

著・和名類聚抄古写本声点本文および索引・風間書房刊）

鎌倉時代

——古今集声点本（秋永一枝・古今和歌集声点本の研究資料集）四座講式（金田一春彦著・四座講式の研究）

室町時代

——補忘記（貞享版）

また、不明のものについては、日本国語大辞典阿克セント史原稿、および、秋永一枝先生の阿克セントカードを見せて頂いてこれを補った。阿克セントを推定したものについては、\*印を付している。（後掲阿克セント表1～5参照）

また、定家仮名遣の語については、「下官集」（橋本博士稿本）、「仮名文字遣」（天文廿一年の奥書のある美濃木版本）、「仮名遣近道」（寛政六年の奥書のある写本）（以上、いずれも、国語学大系所収）を参照し、それぞれ、下・カ・チの略号をもって示している。他、定家本の類に見られた定家仮名遣には、印を付した。

## 二 表記の状況

### (1) 歌部分の異表記

a、定家仮名遣にあるもの (1) 内表出数  
を—をきのゐて カ(1)、をく(置) 下カ(6)、

をくる(遅) 下カ(5)、をしてるや カ(1)、

をそし(遅) カチ(2)、をす(押)。(1)、

をと(音) 下チ(6)、をとほ山 下カチ(4)、

をとほのたき (2)、をとつる チ(2)、

をとる チ(1)、をのか カ(1)、をのれ カチ(1)

をる(織)。(3)、をろか 下(2)、

お—おくろさき。(1) かめのお 下カチ(1)、

おのへ 下カ(1)、おはな 下カ(2)、おさ(成) カ(1)、おさお

さし カ(1)、おし(借) カ(6) 1、おしむ(借) カ(2)、おる(折)

下カ(2)、ひおり カ(1)、おり 下(1)、おりはへて カ(2)

b、定家仮名遣にないもの

を—をきつ白浪(1) (十一—6—4) cf おきつ白浪(十八—28—13)

をくて (1) (十六—9—13)

をとろく (1) (十六—13—9)

をのみ (1) (十七—18—10)

お—玉のお (2) (十三—30—10、十九—15—1)

みお (1) (十七—13—11)

おはり (1) (十六—13—4)

これらの語のアクセントを調べると、定家仮名遣にあるものに

ついては、「をきのゐて」「をとる」「ひおり」の他はすべて「を」上声、「お」平声の区別が、鎌倉期アクセントに合致していることがわかる。(アクセント表1参照)

定家仮名遣にない表記の語で、鎌倉期アクセントに合致したのは、「をのみ」「みお」で、「をとろく」は、室町期アクセントに合致している。

「をきつ白浪」については、「おきつ白浪」の表記が、歌部分(994・十八—28—13)に1例みられる。鎌倉期アクセントはおきつであるが、注部分では、「ヲキツ白浪」の表記をとっているので、室町期では高いアクセントを持ち「を」表記が一般となっていた語と思われる。

また、表出箇所を見ると、(474・十一—6—4)で「心算をきつ」となっている。その注部分には、「心ヲ、キツト云ルハ人ニ着タル心也」とあり、「置く」の掛詞であることから、「を」の表記をとったものと思われる。「置く」は、16例すべて「をく」と表記しており、「をを置く」では、次の2例に同様の表記がみられる。

秋算をきて 279・五—18—10  
君算をきて 1093・二十—24—12

「玉のお」の表記については、2例「お表記に対し、「玉のを」の表記も1例(十三—28—5)見られる。また、注部分の表記は、「玉のお」の表記と同一箇所(十三—30—12)、「玉ノオ」の表記が1例ある他は、すべて、「ヲ」表記である。鎌倉期アクセントでは、たまのをであり、「緒」も上声のアクセントを持っているが、「玉の緒」が一語と意識された低起式四拍語と考えられ

ば、鎌倉・室町期のアクセント変化により、○○○●●○○○  
となつてゐるので、「玉のお」の表記は、アクセント変化を経た  
後の型に合致していることになる。

「を」ところく」についても、同様に低起式四拍語でアクセント変  
化を経た●●○○○型とみれば、アクセントに合致している。

「をもみ」については、「仮名文字遣」に「露おもみ おもきの時は  
をもしの時は」の記述があるが、これにはよつていない。「重し」のアクセ  
ントは●●○○○である。また、「古今集声点本」諸本にも、「をもみ」  
の表記で上上平の声点が付されている。したがつて「をもみ」  
は、上声アクセントに合致した表記と言える。

「をくて」では○○○●○○○のアクセント変化の表われたも  
のと思われる。

「おはり」については、アクセント変化が考えられず疑問であ  
る。(アクセント表2参照)

以上のように、異表記例のほとんどが鎌倉期アクセントに合致  
し、これらは、規範的な定家仮名遣にもみられる語であつた。こ  
れに對し、わずかに定家仮名遣にない表記の語があり、これらにつ  
いては、アクセント変化が個別的・形態的に現われたものとみら  
れる。

## (2) 歌部分の正表記

を―玉のを<sup>(1)</sup>、をくら山<sup>(2)</sup>、をしほ<sup>(1)</sup>、をの<sup>(5)</sup>、をふね<sup>(1)</sup>、あを  
やき<sup>(1)</sup>、あをつくら<sup>(1)</sup>、しをに<sup>(1)</sup>、はせをほ<sup>(1)</sup>、みをつくし  
<sup>(1)</sup>、をか<sup>(3)</sup>、をかたまの木<sup>(1)</sup>、をたまき<sup>(1)</sup>、をちかた人<sup>(1)</sup>、  
をち<sup>(遠方)</sup> <sup>(1)</sup>、をとこ<sup>(1)</sup>、をは<sup>(1)</sup>、をみなへし<sup>(山)</sup> <sup>(物名歌)</sup> <sup>(1)</sup>、

をり<sup>(居)</sup> <sup>(8)</sup>、をんな<sup>(1)</sup>、田をさ<sup>(1)</sup>、

お―おいらく<sup>(2)</sup>、おゆ<sup>(老)</sup> <sup>(3)</sup>、おき<sup>(沖)</sup> <sup>(4)</sup>、おきつ<sup>(5)</sup>、おきひ<sup>(1)</sup>、

おきふし<sup>(1)</sup>、おく<sup>(起)</sup> <sup>(4)</sup>、おく<sup>(奥)</sup> <sup>(1)</sup>、おく山<sup>(6)</sup>、おこる

(興)<sup>(1)</sup>、おつ<sup>(落)</sup> <sup>(5)</sup>、おとうと<sup>(1)</sup>、おとろふ<sup>(1)</sup>、おなし<sup>(2)</sup>、

おに神<sup>(2)</sup>、おはします<sup>(1)</sup>、おひ<sup>(帯)</sup> <sup>(1)</sup>、おふ<sup>(生)</sup> <sup>(4)</sup>、おふ

(負)<sup>(1)</sup>、おふしかうち<sup>(1)</sup>、おほあらし<sup>(1)</sup>、おほいまうち君<sup>(8)</sup>、

おほかた<sup>(1)</sup>、おほかは<sup>(1)</sup>、おほきおほいまうちきみ<sup>(3)</sup>、おほ

きみつの位<sup>(2)</sup>、おほきみ<sup>(2)</sup>、おほささき<sup>(1)</sup>、おほさは<sup>(1)</sup>、

おほす<sup>(寛)</sup> <sup>(1)</sup>、おほせ<sup>(仰)</sup> <sup>(2)</sup>、おほせらる<sup>(1)</sup>、おほそら<sup>(3)</sup>、

おほつかなし<sup>(1)</sup>、おほとものくろぬし<sup>(1)</sup>、おほなほひ<sup>(1)</sup>、お

ほぬさ<sup>(3)</sup>、おほふね<sup>(1)</sup>、おほゆる<sup>(埋)</sup> <sup>(1)</sup>、おほむ<sup>(御)</sup> <sup>(2)</sup>、お

ほゆ<sup>(寛)</sup> <sup>(1)</sup>、おもひ<sup>(思・名詞)</sup> <sup>(4)</sup>、おもふ<sup>(4)</sup>、おもほゆ<sup>(4)</sup>、

おや<sup>(親)</sup> <sup>(1)</sup>、おろし<sup>(1)</sup>、おろしこめて<sup>(1)</sup>、いなおほせ鳥<sup>(1)</sup>、

(無印は定家仮名遣の書にある語、は古今集にある語)  
―は定家仮名遣書と異なる表記の語

これらの語は、ほとんど定家仮名遣書の用法にもあり、またア  
クセントの上からも、を―上声、お―平声の書きわけが、鎌倉期  
アクセントによく合致している。

「田おさ・おほささき・おほさは・おほす」は定家仮名遣書に  
はなかったが、古今集諸本に見られる表記である。

定家仮名遣書の表記と異なつたものは、「をとこ・おきひ・お  
ふしかうち」で、「をとこ」については、平安○○○―室町●●  
○のアクセント変化のあつた語である。

「おきひ・おふしかうち」は古今集諸本においても同表記様々  
で、表記の定まりにくい語であつたと思われる。特に「おふしか

うち」については、延五記（仮―3―3）「おふしかうち」とあり、他古今集諸本にも声点・注が付されているので、表記と読みの問題もあると思われる。

以上のように歌部分の「お・を」の書きわけは、アクセント仮名遣「上声―を、平声―お」の原則に従い、鎌倉期アクセントを反映している。また、このほとんどが、規範的な定家仮名遣に合致している。これは歌部分が古今集の引用であるためである。

定家仮名遣と異なる表記をとった語の中には、室町期のアクセントに合致するものも認められた。

### (3) 注部分の異表記

注部分の異表記については、歌部分の表記との関連を考え、次の観点から見えていくこととする。

i) オ・ヲの両表記を混用するもの

ii) 歌部分の表記にも見られる異表記

iii) 注部分にだけ見られる異表記

(i) オ・ヲの両表記を混用するもの

ヲの下はオ表記の用例数)

ヲキ(沖)<sup>9/4</sup>、ヲキツ<sup>3/2</sup>、ヲキテ<sup>1/1</sup>、ヲコス<sup>1/1</sup>、ヲコリ<sup>2/2</sup>、ヲ

コル<sup>9/2</sup>、ヲツ(墮落)<sup>1/1</sup>、ヲトス<sup>4/3</sup>、ヲトロフ<sup>9/1</sup>、ヲハシマ

ス<sup>2/1</sup>、ヲフ(生)<sup>1/2</sup>、ヲヒタ、シ<sup>1/1</sup>、ヲホス(負)<sup>1/2</sup>、ヲヤ<sup>1/2</sup>、

ヲロカナリ<sup>1/1</sup>、ヲモムキ<sup>1/4</sup>、御時<sup>1/1</sup>

オの下はヲ表記の用例数)

玉ノオ<sup>1/3</sup>、ハセオ<sup>1/1</sup>、ミオツクシ<sup>4/2</sup>、田オサ<sup>1/5</sup>、オシ(借)<sup>9/2</sup>、

オトメ<sup>1/1</sup>、オハ<sup>1/2</sup>、オリハヘテ<sup>1/1</sup>

ヲの異表記の語は、アクセントを調べるとその多くが、鎌倉期平声が室町期上声へとアクセント変化を生じたためと考えられる。特に、ヲキ、ヲキツの混用が目立つが、これは歌部分ではすべて「お」表記で、定家仮名遣にあるが、アクセント変化により○→●となった室町期アクセントを反映しているものと考えられる。(アクセント表3―1参照)。

オの異表記の語は、玉ノオ、ハセオ、田オサなどで一語としての結合の度合が増してアクセント変化を生じた可能性が考えられる。

オトメについては、古今集諸本の声点から鎌倉期●●●のアクセントであるが、秋永氏はこれを、多数型●●●のアクセントの類推から生じたものとし、オトメのアクセントに古くからの○●●型の共存の可能性を指摘されている。したがってオトメ・ヲトメの混用は、○●●●の両アクセントを反映した表記と考えられる。

また、オハについて、仮―15―12で「御オハノアマウヘ」と注記があり、また七―4―14・348の「御をはの御祖母也」の注の中に、「御ヲハ」(七―5―2)の表記がみられる。おば(祖母)のアクセントについて秋永氏は、御(おはむ)と複合した場合○●●になる(と説明され、○●から転じた○●の存在を認め、○●●●の両アクセントと推定しておられる。延五記の表記例では、なお疑問も残る。

ミオツクシについては、鎌倉期●●●●のアクセントからは疑問であるが、ミオ●○からの類推によるかと思われる。

田オサは、同一箇所（十九—22—2・103）の歌部分で「田をさ」、注部分で「田ヲサ」、この他に4例ヲ表記が出ているので、例外であろう。ただし、鎌倉期アクセントには、○○●、○○○、○○●の三種が見られる。

オシについて、混用の用例を検討すると、

ヲ（十二—16—4）万<sup>1259</sup>ワカ身ヲシトハテハ花ハナルトモ

（十七—1—14）

タツ事ノヲシキト云事

オ（十二—30—7）

何カオシカルヘキト也

（十三—10—3）

名ノ立テモオシカラス

（十五—11—6）万<sup>732</sup>今シハヨ名ノオシケクモ我ハナシ

とあり、十七—1—14の例については、同一箇所（十九—22—2・103）の歌部分では

（十七—1—5・864）「たたまくおしき」と「お」表記で、これは

定家仮名遣にも合致し、歌部分に計6例みられる。

「惜し」のアクセントを調べると、二拍形容詞シク活用型で鎌倉時代には次のように推定されている。<sup>(15)</sup>

終止形

連用形

連体形

已然形

未然形

●●型

○○型

○○●型

○○●●型

○○●●●型

またカリ活用については「連用形十あり」の二語と意識されたアクセント型を持ったと考えられている。<sup>(15)</sup>

このことから、オシカル、オシカラス、オシケクは、○○●●

または、○○●●のアクセント型で、ヲシキは、鎌倉時代○○●

型であったものが、室町時代には●○○のアクセント型に変化した

と考えられ、「オシ」の注部分におけるオ・ヲ表記の混用状況

もこれを反映するものと思われる。（アクセント表3—2参照）

(ii) 歌部分の表記にも見られる異表記

ヲ（ヲク）<sup>(置)</sup>55、ヲクル（遅）1、ヲシテルヤ4、ヲス（押）1、ヲ

ソシ（遅）5、ヲト（音）5、ヲトハ山3、ヲツル（訪）6、ヲ

トル（劣）3、ヲトロク2、ヲノカ5、ヲモシ（重）1、ヲル

（織）7、

オ（オノ）へ3、オハナ3、ミオ3、オル（折）5

ヲの異表記例については、オク（置）1例（別—24—9 引歌）

とオル（織）1例（五—25—12）の他は、オ表記と混用することがな

く、「ヲトロク」以外は、定家仮名遣にある用法である。アクセ

ントの面から見ると、各時代を通して、「ヲ」の音節に上声のア

クセントを持っている。

オの異表記例については、ヲ表記と混用することなく、ミオの

他は定家仮名遣にある用法である。アクセントの上からも変化が

なく鎌倉・室町期ともに平声のアクセントを持っていると思わ

れる。（アクセント表4参照）

「ヲトロク」は、四拍二類動詞でその連用形は、平安時代○○

●●のものが、鎌倉時代後期に○○○○●型に変化し、さらに室町

時代にはいつて○○○○●型→○○○○●型へという、型そのものの

変化に乗って●○○○となつてゐる。定家仮名遣にない用法であ

るが、歌部分に1例（十六—13—9・849）「をとろけは」と出て

おり、注部分では2例「ヲ」表記で出るのは、このアクセント変

化の結果であろう。

注部分が、歌部分の注釈の上で「トハ」と引く場合があるの

で、これが表記上の制約を与える可能性を考えて用例を見なおし

たが、歌部分と注部分との表記が異なるものも多くあり、歌・注部分が同じ表記になるものは、前述のようにアクセントが合致していたので問題なかった。しかしその反対に、「玉ノオ」「ミオ」の場合は、歌・注部分ともに「オ」で定家仮名遣にない用法であるが、アクセントには合致した表記なので、歌部分でも一部、アクセント仮名遣によるアクセント変化の影響が及んでいるものと考えられる。

### (iii) 注部分にだけ見られる異表記

ヲーヲキ(熾) 3、ヲキ火 1、ヲキツ(掟) 1、ヲキノ国 1、ヲクル  
(贈) 2、(送) 5、ヲコス 1(遣)、ヲコタリ 2、トリヲコナヒ  
1、ヲサヘル 1、ヲシ返ス 1、ヲシナヘテ 3、ヲシハカル 2、  
ヲソル 1、ヲタヤカ 2、ヲツ 1(墮) / 1(落)、ヲチタキツタ  
キ 1、ヲトタナハタ 2、ヲトロカス 1、ヲト、1、ヲト／＼  
2、ヲノツカラ 3、ヲノ／＼ 1、ヲハシマス 2、ネヲヒエ 1、  
ヲホイ河 1、ヲホツカナシ 2、ヲホユ 1、ヲホロナリ 1、  
御時<sup>ヲホツ</sup> 1、ヲモムキ 1、ヲヨソ 1、ヲヨフ 2、ヲロス 3、ヲロ  
ソカ 3、  
オースサノオノ尊 2、ハセオ(長谷雄) 2、タラチオ 1、ミツノオ  
1、オ(尾) 2、ミオツクシ 1、田オサ 1、オサムル(治) 2、  
オトメ 1、オハ 1、

ヲの異表記では、「ヲ」の音節が、低から高へとアクセント変化している語が多くみられた。またアクセント変化はないがヲの音節に上声の合致する語に、「ヲクル・ヲコス(遣)・ヲサヘル・ヲノツカラ・ヲノ／＼・ヲヨフ」があり、これらは歌部分にはない

語である。また「ヲキ・ヲキヒ」は定家仮名遣にある用法でアクセントも上声に合致している。(アクセント表 5 参照)

その他、アクセントの上からは疑問であるが、定家仮名遣にあるものに「ヲキノ国、ヲコタル、トリヲコナヒ、ヲシハカル」がある。「ヲハシマス、ヲホイ河、御時<sup>ヲホツ</sup>」などの表記については不明である。

また、歌部分では「お」であるが、注部分で「ヲ」表記で出たものに「ヲツ、ヲト／＼、ヲホユ、ヲロス、ヲキ火」があり、ヲキ火の他は、鎌倉・室町のアクセント変化のあったもので、これが反映されたものである。さらに歌部分と同一箇所の注記で、表記を異にするものに次の例が見られた。

ヲチタキツタキ(十七—42—12) 928 おちたきつ滝  
ヲホツカナシ(一—17—13) 29 おほつかなくもよふこ鳥か  
な

しけ  
(九—14—11) 417 夕月夜おほつかなきを玉く

。足ヲレ(十四—30—11) 739 駒のあしおれまゐのたなはし  
「ヲチタキツタキ、ヲホツカナシ」は、アクセント変化により表記の異なったものと説明しうるが、「足ヲレ」は不明である。

オの異表記の中で、「スサノオノ尊」は、歌部分(別—10—8)で、「すさのをのみこと」に対し、同一箇所「素戔嗚尊」<sup>スサノヲ</sup>となつてゐる。アクセントは、鎌倉期<sup>スサノヲ</sup>のミコトであり、スサノヲを四拍語一語とみれば、アクセント変化で●●○となつた結果とみられる。「ハセオ」についても三拍語一語と意識され

○○●●○○○の変化の生じたものかと思われる。ただし、「長谷雄卿」(一一一—13)がある他、「雄」一語として上声のアクセントを認め「ヲ」表記とした例に、「高雄(十七—39—10)、多力雄尊(二十一—4—2)中納言公雄(二十一—6—6)の例がある。「ミツノオ、オ」は定家仮名遣の用法にもあり、アクセントもミツノオ・オともに平声に合致している。ヲ表記が1例出るが、「ミツノヲノ御門」(減—5—2)は疑問である。

「オサムル」は、鎌倉期○○○●●室町期●○○○にアクセント変化があり合致しない。

#### (4) 注部分の正表記

ヲ(ヲ)緒9、玉ノヲ<sup>3/4</sup>、アハヲ1、富緒川5、一雄<sup>4/2</sup>、一尾2、芋1、ヲクラ(小倉)2、アヲヤキ2、ウヲ1、ミヲツクシ<sup>2/4</sup>、ヲカ6、ヲカス6、ヲサマル2、ヲシ(惜)<sup>2/3</sup>、ヲシム2、トキツヲシヘ鳥1、ヲタマキ2、ヲチカタ人2、ヲチ(伯父)1、ヲトメ<sup>1/2</sup>、ヲノコ1、御ヲハ<sup>3/4</sup>、ヲハリ1、ヲハル1、ヲミナヘシ7、ヲリ(尾)6、足ヲレ1、手ヲル1、ヲリ句1、ヲリ(折名詞)2、ヲリハヘテ<sup>1/2</sup>、田ヲサ<sup>3/4</sup>、ヲサ<シ1、ヲサ(箴)1、ランナ1

オ—オク(起)5、オキウシ1、オキフシ2、オク(奥)5、オナシ1、オハス1、オフ(生)2、(色)2、オホイマウチキミ1、オホサ、キ2、オホタトコロ1、オホキミツノクラキ1、オホキミ7、オホシ(多)3、オホス1、イナオホセ鳥3、オホシメス1、オホヤマト2、オホヤシマ1、オモシロシ2、オモフ2、オモヒクサ1

ヲの正表記の語については、アクセント変化がなく「ヲ」の音節が上声であるものが多い。定家仮名遣の用法、および歌部分の表記にもあるものがほとんどである。

ヲサマル(○○●●○○○)・ヲシ、ヲシム○○●●○○○については、アクセント変化があり、定家仮名遣、歌部分では「お」の表記をとっている。

「手ヲル」は、鎌倉期アクセント●●○○に合致しているが、大野晋氏の指摘以来、問題の語である。他、「足ヲレ(十四—30)、折句(九—6)、ヲリ(三—11)、ヲリハヘテ(三—11)」についても、疑問である。

歌部分では、「足おれ(十四—30)、おりはへて(三—11)、おりはへ(十一—45)」の表記が見られ、「折」については「おる」(動詞)12例をはじめ、定家仮名遣書の用法で「お」表記となっている。「オリハヘ(十一—45)」の例は、歌部分引用のためである。

また、声点の付されたものに、(十七—14—4・884)かくれなんとしける<sup>境</sup>おりに」の例がある。

「ヲサ・ヲサ<シ」も平声のアクセントで歌部分、定家仮名遣では「お」である。

オの正表記の語も、そのほとんどが歌部分でも「お」の正表記で見られるもので、定家仮名遣の用法にあるものである。

「オク(起)、オキウシ、オキフシ」については、「起ク」が、アクセント変化により、室町期●○○型になっているが、定家仮名遣および歌部分の表記も「お」であり、また用例をみると、語注として歌部分を引いているので、「オ」の表記が残ったものであろう。



特に、十一—4—5で「おきてヨルハ起也」と声点に関する注があり、また十三—16—14でも「起テト云ハントテノ詞也」というように、漢字をあてて注を加えていることから、起○●のアクセントでは、「起」の意が通用しなくなっていたことをうかがわせるものである。

「オホシ」も、○○●から●○○にアクセントが変化しているが「オ」の表記である。「大—オホ」の語のつながりが関係するかと思われる。四—43—4の例に「オホカルハ多也」と注があり、「多」はすでに○○●のアクセントでないことを想像させるものである。

「オホス」も○○●から●○○に変化している語であるが、表出例がイナオホセ鳥の注の箇所であるため、アクセントにかかわらず「オホセ」と書かれたものであろう。

このように、注部分に語注である性質上、必ずしもアクセントに応じた表記がなされない場合もあるようである。

### 三 ま と め

1 歌部分・注部分の「お・を、オ・ヲ」の書きわけは、アクセント仮名遣により「上声—を・ヲ、平声—お・オ」を原則としている。したがって歌部分には鎌倉期のアクセントが反映され、注部分では、鎌倉期のアクセント型から室町期のアクセント型への変化を反映して、頭高の語が多くなり「ヲ」表記をとるものが多くなっている。

2 歌部分にもある異表記は、定家仮名遣にもある用法で混用が

少なく、鎌倉・室町ともにアクセント変化のなかった語であった。注部分にだけ見られる異表記は、アクセント変化したものが多く、室町期アクセントによっている。

3 注記の性質上、歌部分の表記の影響・制約から、アクセントに合致しない表記や、オ・ヲの両表記の混用もみられる。

4 語による個別的なもので、アクセントだけでは説明しがたいものがあつた。複合語などでは、接続の度合によりアクセントも多様に考えられ、両表記の混用例ではこういった点から、表記の定まりにくい語と思われるものがあつた。

以上、歌部分・注部分の表記の状況から、『延五記』における「お—を、オ—ヲ」の書きわけが、アクセント仮名遣を原則とするものであることが明らかになった。したがって歌部分には鎌倉期の、注部分には室町期のアクセントを反映した表記が認められ、両表記の違いに、鎌倉期と室町期とのアクセントの変化の影響を見ることができた。

歌部分・注部分の表記の状況を、語例数とのべ表出数によって、アクセントとの関連でみると次のようになる。(上—語例数、下—のべ表出数)

注部分	歌部分	
26語 56例	91語 267例	鎌倉期アクセントに合致
90語 298例	5語 5例	室町期アクセントに合致
4語 4例	5語 5例	いずれにも合致せず
21語 25例	2語 2例	アクセント未詳

(室町期のアクセント未詳のもの)

おほせらる・おほとものくろぬし (以上語例) ・ヲキツ(掟) ・ヲ  
キノ国・ヲサ(箴) ・ヲタヤカ・ヲト・ヲトタナハタ・ヲハシマ  
ス・ヲホイ河・ヲホロナリ・御時・ヲリ・ヲリ句・ヲリハヘテ・  
足ヲレ・白尾・ミツノヲ・トキツラシヘ鳥・ネヲヒエ・オヒタ  
・シ・オホシメス・タラチオ・(以上語例)  
しかし一方、歌部分・注部分の相互的な影響も見のがすべきで  
なく、「安定した表記」という点からは、規範的な「定家仮名遣」  
の用法が関わっていると思われる。

ことに、歌語(枕詞・地名)や特別な用語では、規範的「定家  
仮名遣」を保つ傾向が見られ、アクセントの変わらないものは、  
混用のない安定した表記となり、アクセント変化のあったものは、  
そのために両表記の混用が生じている。これは注部分の表記でよ  
く表われ、歌部分においても、若干見られた。このことは、『延  
五記』の古今集聞書としての特質をよく表わすものである。

注(1) 天理図書館蔵「古今和歌集聞書」全二十三帖。秋永一枝・

田辺佳代翻刻の「古今集延五記」(笠間書院刊)がある。な  
お本文中の表出箇所は、(巻数―頁―行)で示している。

(2) 『古今集延五記』の表記について―ハ行転呼を中心に―  
(国文学研究・第六十三集)

(3) 大野晋「仮名遣の起源について」(国語と国文学・昭和25  
年12月号)「藤原定家の仮名遣について」(国語学72)

(4) 翻刻「古今集延五記」(前掲) 解題

(5) 金田一春彦「国語アクセントの史的研究原理と方法」(四座  
講式の研究)

(6) これらの検索にあたつては、次の諸論文を参照した。

大野晋「仮名遣の起源について」(藤原定家の仮名遣)(前  
掲)・追野虔徳「定家の仮名遣いの成立について」(九大・  
語文研究27)・桜井茂治「土佐日記転写本の仮名遣について」  
(国学院雑誌・昭39・5)・小笠原一「定家自筆本のかなの  
用法」(学芸国語国文学12号)・遠藤和夫「定家かなづかい」  
の再評価」(国文学ノート14・昭51・3)

(7) 秋永一枝「古今集声点本における「名」のアクセント」  
(国文学研究・第六十七集)で、「奥」および「沖」のアク  
セントを○●○●○の変化のあったものとされている。

(8) 「を」表記における連読符の問題

連読符の用いられているもの  
わかれををしみ 640・十三―16―1  
名ををしみ 672・十三―30―8  
物をしとは川 749・十五―3―5

連読符の用いられないもの

なきつる花をおりてける哉 100・二―23―6  
秋をきて時こそありけれ 279・五―18―10  
人に心かをきつしら浪 474・十一―6―4  
名ををしみ(は行かえ) 653・十三―22―7  
うれををしみ 891・十七―18―10  
君をきてあたし心を 1093・二十―26―12

連読符は清濁にもかかわらず、また二語にわたる場合も用  
いられるが、ろーか、しー志、ハーも、などは書きわけて  
いる例もみられる。「を」を「お」についても右にあげた  
ように書きわけたものが見られ、これらでは、助詞「を」  
に「を」の字体をあてている。

小松英雄氏は「藤原定家の文字づかい」(言語生活1974 272)  
で、「を」に補助字体として「中和」の働きを指摘された

が、『延五記』における「哉」の用法にはこのような性質は特に見いだされない。

(9) 秋永一枝「古今和歌集声点本の研究」による

うれをゝもみ―梅沢家本・古今私秘聞

つゆををもみ―古今訓点抄、など

(10) 前掲「古今和歌集声点本の研究」による

おふしかうちおふしかうちの 寂恵本古今和歌集加注

おふしかうちおふしかうち 毘沙門堂本古今集註

おふしかうち 堯恵本古今集声句相伝開書

おふしおふし 古今私秘聞

おふしおふし

凡河内

(11) 古今訓点抄

歌部分の「玉のお」の表記について一語の意識から○○

○●○○のアクセント変化を考えた。注部分の「玉

ノオ」表記は歌部分(673・十三―30―20)で「あふ事は玉

のおはかり」について「哥ノ心ハ玉ノオハカリトハ」と引

用注記しているためで、この他では、注部分では「年ノヲ、

箱ノヲ、富ノ緒」など「ヲ」と表記し(計19例)、これはア

(12・13) 秋永一枝「古今和歌集声点本の研究 研究篇上」の

原稿による。

(14) 金田一春彦「四座講式の研究」P 405―407

(15) 同 P 408

(16) 同 P 393―394

(17) この例では声点に加えて漢字の注がある。こまつひでお

氏は「仮名文の表記原理」(国文学漢文学論叢十九輯九十七

号)で、仮名文における漢字と声点の「正しい解釈を確定

的に提示する」機能に類似を指摘されている。この点か

ら、延五記の注記にみられる両者の重複は、かなり丁寧な

ものとして興味深い。

次に「お・を」の表記で声点の付されているものを参考と

して掲げる。

。声点のアクセントが表記に合致するもの

をかたまの木

おきて 431. 十一―4―13

おほしてふ 470 十一―4―5

おほしてふ 1027 十九―30―12

おほしてふ 884. 十七―14―4

おほしてふ 四―43―4

オホカル

。合致しないもの

をかたにに 仮―1―4 (他本には上上平平とあるのか)

かたをなみ 仮―1―13 (解釈上の問題か)

おほきみ 仮―1―6 (不明)

アクセント表 1

	平	安	鎌倉	室町	表出数	延五記表出箇所
をきのゐて をく(置)	● ○	○ ○ ○ ○ ○	● ●		16 1	減 4 四 41・五 7(2)、18・六 11・九 13・十二 1 7、8、14・十五 6・十七 1、38・十八 31・ 十九 32・二十一 9、24 八 4、10・十一 27・十八 31・十九 42 十七 21
をくる(遅)	● ● ○	● ● ○	● ● ○		5	
をしてる(や)	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		1	
をそし(遅)	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		2	一 7・十七 10
をす(押)	● ●	● ●	● ●		1	一 12
をと(音)	○ ○	○ ○	○ ○		6	五 2・十一 18・十一 5・十八 32・二十 16・ 減 7
をと(山)		● ● ● ●	● ● ● ●		4 (2)	三 6・五 6・八 11・十一 5・(十七 42・ 減 7)
(のたき)	● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		2	六 9・十八 13
をとつる	○ ○	○ ○	○ ○		1	減 5
をとる(劣)	○ ○	○ ○	○ ○		1	十三 13
をのか	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		1	十九 30
をのれ	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		3	六 1・十七 39・十九 6
をる(織)	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		2	仮 19・十二 5
をろかなり	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●		1	二十 22
おくろさき	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○		1	七 7
かめをお						

アクセント表 2

	平	安	録	倉	室	町	表出数	延五記表出箇所
をきつ白浪							1	十一—6
をくて	○ ○						1	十六—9
をとろく	○ ○						1	十六—13
をもみ	○ ○						1	十七—18
玉のお	○ ○						2	十三—30・十九—15

おのへ							1	四—36
おはな							2	十一—9・十一—20
おさ	○						1	十五—6
おさくし							1	十九—11
おし(借)	体 ○ ○						6	四—7・五—9・六—15・十二—28・十三—10・十七—1
おしむ	* ○ ○						2	八—6、19
おる(折)	○ ○						12	一—5、19、26、33・二—8、23、41・四—41・五—13・五—17(2)・十七—2
ひおり							1	十一—8
おり(折)(名)							1	十七—14
おりはへて							2	三—11・十一—45

注 ( ) 内は漢字補注、( ) 内は品詞の別、体は連体形のアクセント

アクセント表 3-1

	平	安	鎌	倉	室	町	表出数	延五記表出箇所
ヲキ(沖)	○ ○		○ ○		● ○		6	十一・十一・二十三・三十・十七・九(2)・二十一・二十六
(ヲキツ)							(4)	(ヲキツ)七・十四・十八・二十九(3)
ヲキテ(掟)(名)	* ○ ○ ○				● ○ ○		1	二・四
ヲコス	○ ○ ○ ●		○ ○ ●		● ○ ○		1	十三・二十七
(ヨミヲコス)								
ヲコリ(名)	○ ○ ○ ○		○ ○ ●		● ○ ○		2	別・五・三・五
ヲコル(動)	○ ○ ○ ●		○ ○ ●		● ○ ○		9	飯・八・三・十七・十一・二十九・三十二(2)・三十八・十二・一
ヲツ(落)	○ ●		○ ○ ●		● ○ ○		1	十五・十六・十九・四十七
ヲトス	○ ○ ○ ●		○ ○ ○ ●		● ○ ○		4	四・三十九(2)・八・二十一・十九・三十九
ヲトロフ	○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ●		● ○ ○		9	一・三十八・二・二十五・二十九・四・二十八・五・十九・十一・三十九、
ヲハシマス	ヲハシタリ						2	40(2)・十四・三
ヲフ(生)	○ ○ ○ ●		○ ○ ●		○ ●		1	飯・十・別・四十
ヲヒタ、シ	○ ○ ○ ●		○ ○ ●		* ● ● ● ● ● ○ ○ ○		1	一・二十九
ヲホス(負)	○ ○ ○ ●		○ ○ ●		○ ○ ○ ○		1	三・十七
ヲヤ(親)	○ ○ ○ ○		○ ○		● ○ ○ ○		1	二十・十五
ヲロカナリ	● ● ● ● ○		○ ○		● ○ ○ ○		1	十三・十八
					○ ○ ○ ○		1	飯・十九

みお	● ● ●	● ● ● ● ○		1	十七・十三
おはり(終)(名)	● ● ●	● ● ● ● ○		1	六・十三

ヲモムキ	○ ○	○ ○	● ● ● ○	1	別 28
御時	○ ○ オホム	○ ○ おほむ		1	七 3

参考 オキ(十一・29・十一・30・十一・41・十四・6)・オキツ(別 44・十一・30)・オキテ(別 47)・オコス(飯 14)・オコ  
リ(別 5・三・5)・オコル(別 9・別 19)・オツ(十・28)・オトス(二・34・十七・44・十五・15)・オトロフ(十八・  
15)・オハシマス(十八・32)・オフ(十四・2・十八・22)・オヒタ・シ(十四・14)・オホス(四・29(2))・オヤ(飯 22・別  
45)・オロカナリ(別 30)・オモムキ(十一・41・十一・43・十四・19・二十一・30) 御時(一・8) (御・慈・飯 31)

アクセント表 3—2

	平	安	鎌	倉	室	町	表出数	延五記表出箇所
玉ノオ			○ ○ ○ ●		● ● ○ ○		1	十三 30
ハセオ(人名)			● ● ● ● ● ○				2	別 41 (2)
ミオツクシ			○ ○ ○ ○				4	十二 10 (4)
田オサ			○ ○ ○ ○				1	十九 22
オシ(惜)	体 ○ ○ ○ ●		○ ○ ○ ○		* 体 ● ● ○ ○		3	十二 30・十三 10・十五 11
オトメ(乙女)	○ ○ ● ●		○ ○ ● ● ● ●				1	別 12
オハ(祖母)	● ●		○ ○ ○ ○ ● ●				1	飯 15
オリハヘテ			○ ○ ○ ○ ● ●				1	十一 45

参考 玉ノヲ(一・22・十一・13・十二・11)・ハセヲ(一・1)・ミヲツクシ(十二・10・十七・34)・田ヲサ(三・9・三・10  
(4)・ヲシ(十二・16・十七・1)・ヲトメ(別 12)・ヲハ(飯 15・七・5)・ヲリハヘテ(三・11)

アクセント表4

ラク(置)	ラク(置)	平
ヤクル(遅)	●● ●○	●● ●○
ヲシテルヤ	●● ●○	●● ●○
ヲス(押)	●● ●○	●● ●○
ヲソシ(遅)	●● ●○	●● ●○
ヲト(音)	●● ●○	●● ●○
ヲトハ山	●● ●○	●● ●○
ヲトツル	●● ●○	●● ●○
ヲトル(劣)	●● ●○	●● ●○
ヲトロク	●● ●○	●● ●○
ヲノカ	●● ●○	●● ●○
ヲモシ(形)	●● ●○	●● ●○
ヲル(織)	●● ●○	●● ●○
オノヘ(尾上)	●● ●○	●● ●○
オハナ(尾花)	●● ●○	●● ●○
ミオ	●● ●○	●● ●○
オル(折)	●● ●○	●● ●○
鎌倉	●● ●○	●● ●○
室町	●● ●○	●● ●○
表出数	55	55
延五記表出箇所	四—41・六—13・十一—3・一四—11・十九—31他 二—30 十七—21(2)・十七—22(2) 四—33 二—30・三—1・十—27・十八—16(2) 一—17・十一—19・十八—32・十九—28・減—7 三—6・五—6(2) 三—6(2)・三—15・四—27・四—29・十五—3 二—26・二—27・四—19 三—13・十五—16 三—2・四—36・四—45・十—1・十三—14 十九—48 一—34・四—5(3)・六—1(2)・十—14 仮—16・四—36・四—37 十—9・十一—21(2) 十七—13(2)・十八—32 仮—25・一—35・五—17(2)・十九—26	延五記表出箇所



